

怪物と移動

——グリンメルスハウゼン『ドイツの冒険者ジンプリチシムス』

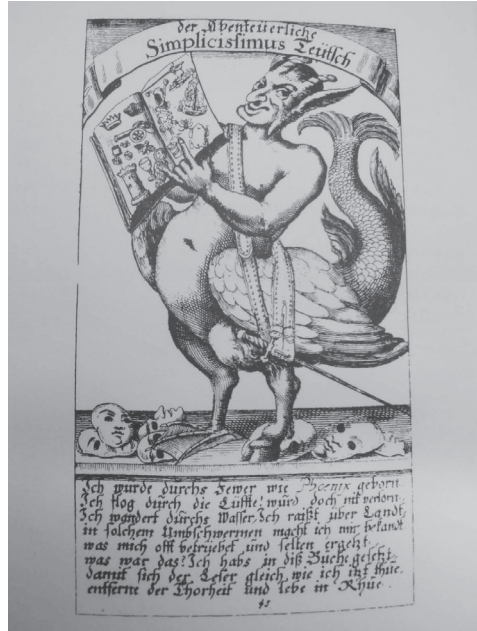
時 田 郁 子

1 はじめに

ハンス・ヤーコブ・クリストフェル・フォン・グリンメルスハウゼン (Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen, 1621/22-76) の『ドイツの冒険者ジンプリチシムス (Der abentheurliche Simplicissimus Teutsch)』⁽¹⁾ (1669) は、『阿呆物語』の邦題⁽²⁾で知られる。それは主人公の通称ジンプリチウス、ジンプリチシムスが「単純 (Simplex)」を意味し、主人公が阿呆としてふるまうためである。この作品は、主人公が三十年戦争の最中の世間に足を踏み入れ、ヨーロッパ各地を放浪した後、無人島で隠者として暮らすようになり、そこで記した回想録をオランダ人船長に託したという形を取る。従来この作品は、主人公が悪行の限りを尽くす点で悪党小説のドイツ版、主人公が孤島で隠者生活を送る点でロビンソン・クルーソーのドイツ版先駆け、主人公が成長する点で教養小説の先駆けなどに見なされてきた。本稿は、作品の表紙に作品内容と無関係に見える物が描かれる点に着目する。十七世紀の文学作品の表紙は一般に作者の意図を汲んで作成されたため、この怪物の図像もグリンメルスハウゼンの作品観に関わるはずである。表紙の怪物は主人公の縦横無尽な移動とどう関係するのだろうか。そこでまず、表紙に記された三種類の情報を分析し、作品内で主人公が様々な場所に赴き、その都度身分を変える過程を追い、最終的に主人公が到達する世界観を明らかにする。それは作者グリンメルスハウゼンの世界観に相当するだろう。

2 表紙

1669年に出版された作品の表紙には、上段に作品名、中段に怪物の図像、



下段にテキストが置かれる。この形式は^{エンブレム}寓意画（上段にモットーとしてのインスクリプティオ、中段に図像であるピクチャー、下段に教訓的なスークリプティオ）に則っているため⁽³⁾、上段の意味を踏まえて、中段の図像を分析する。下段のテキストは図像を解釈する手掛かりになる。

上段では「ドイツの冒険者ジンプリチシムス（der Abenteuerliche Simplificismus Teütsch）」と、作品名が示される。ただし、「ドイツ（Teütsch）」という語の解釈に諸説——舞台が三十年戦争のドイツであることを示すという説、作品が「ドイツという国の典型的運命を表現している」という説、作品がラテン語ではなく俗語のドイツ語で書かれたことを強調する説など⁽⁴⁾——ある点に留意しよう。舞台がドイツであることを示すという説の通り、三十年戦

争は歴史上過去最大にして最後の宗教戦争とされるが、市井の人々はカトリックとプロテスタントの教義の違いを気に掛けず、戦乱の世をくぐり抜けることに専心していた。この作品はそうした雰囲気を実験してあり、読者は主人公の足取りを通してこの時代を擬似体験できる。また、作者のグリーンメルスハウゼンは貴族や知識人ではなく、市井の一人物としてこの時代を生きただため、俗人が俗語で書いた作品としての特徴も強調すべきであろう。だがここでは、主人公がフランスやスイス、ロシア、地中海沿岸、小アジアなど各地を放浪するときに、ドイツ人であると意識する点に着目したい。彼は、パリで「ドイツの美男子」と呼ばれ、オーストラリア近くの無人島で出会ったオランダ人船長から「南ドイツ人」と呼ばれており、ドイツ語圏から離れたところで「ドイツ人」であることに自覚的になる。この作品がヨーロッパに持ち帰られた回想録であることも、主人公が「ドイツ人」であることを強調する。タイトルの「ドイツの冒険者ジンプリチシムス」にはこれらの意味が重層的に織り込まれている。

次に中段を見てみると、ここに描かれる怪物は、上半身は人間のようであり、男性と女性の両方の特徴を備え、鳥の羽と魚の尾、鳥と馬の足を持ち、ハイブリッドな存在である。パースによると、グリーンメルスハウゼンは怪物のイメージをホラティウスから引き継いだ。ホラティウスは『詩論』の冒頭で、「画家が、人間の頭を太った馬の首に付け加え、他の四肢をあちこちから持ってくるならば、美しい羽毛で飾り立てて、下半身を黒い魚の鱗に似せて醜悪にしても、上半身は絶世の美女の鑑になる。』⁽⁵⁾ という具合に、下手な詩を怪物として表現する。表紙中段に描かれる怪物は、ホラティウスが名指した動物の部位を備え、さらに先の尖った大きな耳と角を持つ。これは、古代ローマの神サトルヌスを連想させる仕掛けになる⁽⁶⁾。怪物の不格好な身体

は、調和や秩序といったこの時代の理想に対立し⁽⁷⁾、魚であっても泳げず、鳥であっても飛べず、足があっても歩けないため、移動は叶わない⁽⁸⁾。腰に差した剣は主人公が戦争に巻き込まれることを示しており、手の中の本は、主人公に関係するアイテム——要塞、大砲、王冠、蜜蜂、赤ちゃん、木、船など——を載せることから、この作品そのものと言える。怪物の足下に転がる複数の仮面は、それぞれが大きさや表情が異なり、主人公が成長とともにキャラクター性格を変える様子を表していると考えられる。

下部のテキストには、一人称の「私」が用いられる。この発話者が中段の怪物であると想定すると、「私」の語る内容作品内容の予告になるだろう。

私はフェニックス不死鳥のように火から生まれた。
 私は大気を飛び回る！落ちることはない。
 私は水中を動き回る、私は大地を旅して回る、
 ほっつき回るうちに、私はわかった。
 そのために心暗いこと多く、陽気になることは滅多にない。
 それは何か？私はこの本に記した。
 読者諸君が、今の私のように、
 愚かさから離れて、静かに生きるために。

ここでは、まず「私」が地・水・火・風の四大元素の中を「ほっつき回る」と述べられる。地・水・火・風は一般に世界を構成する要素とされ、中段の怪物の各部位は、人間および馬が地、魚が水、鳥（ここで不死鳥と表現される）は火と風の元素に対応する。「私」はハイブリッドな身体を持つために、森羅万象の中を自在に動き回ることができるのである。一行目の「不死鳥の

ように火から生まれた」という部分に関して、ゴイレンは、無知な主人公が知識を得てキリスト教徒になること、次いで経験を重ねて世間知に長けた人間になることを指すと解釈する⁽⁹⁾。確かに、作品内で不死鳥が言及される箇所に、「君が不死鳥さながら火をくぐって悟性なき状態から悟性に、つまり新しく生まれて、新しい人間の人生にたどり着いたと想像してごらん。」(S. 142)とあり、主人公は、無知な状態から知性を獲得し、キリスト教徒になる。その途中、彼は失敗を重ねて、その都度挽回する。その様が不死鳥の誕生ないし再生に相似する。また、怪物の鳥の部分は「大気を飛び回る」ため、魚の部分は「水中を動き回る」ため、馬の足は「大地を旅して回る」ためにあるのだが、このプロポーションでは飛ぶことも動き回ることも旅して回ることも不可能である。移動不可能な「私」は、それでも移動し、何かをわかった結果、「心暗いこと多く、陽気になることは滅多にない」という。先に表紙の怪物の顔がサトゥルヌスを連想させると述べたが、サトゥルヌスは占星術において不幸と憂鬱を意味する惑星である土星と同一視される古代ローマの農耕神であり、怪物がサトゥルヌス風の相貌を帯びるのは、憂鬱な気持ちを抱えるためなのである。表紙の怪物は、主人公の歩みを通してわかったことを伝えるべく、「読者諸君」に本を開くよう誘っている。

3 知への渴望——身分と場所の移動——

怪物の誘いにしたがって作品を繙くと、主人公は徹頭徹尾無知な存在として登場してくる。彼は人里離れた農家で両親と姉と暮らしていたが、兵士の一団が実家を荒らした際に、命からがら逃げ出して、森に迷い込み、そこで一人の隠者に会い、珍問答を行った。

隠者：お前は何という名前だ？ジンプリチウス：小僧。隠者：お前が娘っこでないことはわかる。お前のお父さんとお母さんはお前を何と呼んでいたのか？ジンプリチウス：おらにはお父さんもお母さんもないよ。隠者：では誰がお前にこのシャツを着せてくれた？ジンプリチウス：おっかあ。隠者：ではおっかあはお前を何と呼んでいた？ジンプリチウス：おっかあはおらを小僧、それにいたずらっこ、のろまのロバ、カラスって言うよ。隠者：ではお前のお母さんの夫は誰だ？ジンプリチウス：いない。隠者：では、おっかあは夜誰と一緒に寝ていたか？ジンプリチウス：おっとう。隠者：では、おっとうはお前を何と呼んでいた？ジンプリチウス：おっとうもおらを小僧って呼んだよ。隠者：ではおっとうは何という名か？ジンプリチウス：おっとう。隠者：おっかあはおっとうを何と呼んでいた？ジンプリチウス：おっとう、それに親方。隠者：おっかあは他の呼び方をしなかったか？ジンプリチウス：うん、したよ。隠者：では何て？ジンプリチウス：不作法者、とんでもないならず者、げす野郎、喧嘩をすると、他にも言ってたな。隠者：お前は両親も自分自身の名前も知らないとは、無知な奴よのう！ジンプリチウス：あんただって知らないじゃないか。(S. 37)

二人の会話がかみ合わず、「無知な奴」である主人公が知的上位にいる隠者に向かって「あんただって知らないじゃないか。」とやり返す点に、この場面の可笑しさがある。隠者は森に迷い込んできた少年に素性を尋ねたのだが、その際に、彼が「お父さん (Vater)」、「お母さん (Mutter)」という標準語を用いたのに対し、主人公は「おっとう (Knan)」、「おっかあ (Meüder)」という方言しか知らず、また、自分に固有の名前があることすら知らない。このと

き主人公は十二歳であり⁽¹⁰⁾、いくら「無知な奴」であっても、自分の名前を知らないのは奇妙である。これには主人公の出生にまつわる事情が関わっている。かつてある貴婦人（実は隠者の妻）が戦火を逃れてたどり着いた農家で出産し、産後しばらくして亡くなったのだが、そのときに農家の夫婦に子どもを託した。その子どもが主人公であり、農家の夫婦は彼を自分たちの子どもとして育て、本人に養子であることを知らせなかった。子どもの本名は、メルヒオール・シュテルンフェルス・フォン・フックスハイム（Melchior Sternfelß von Fuchsheim）（S. 480）といい、貴族であることを示す「フォン」が名字にあるように、彼は正真正銘の貴族である。しかしながら主人公一家は人里離れたところに住み、名字で呼び合う相手がなく、主人公が自分の名前を意識する機会はなかった。主人公のファーストネームのメルヒオールは、彼が「おっとう」と呼ぶ農夫に因んだ名であり、東方の三博士の一人メルキオールに由来する⁽¹¹⁾。父と子が同名であるため、家庭内で息子は「小僧（Bub）」と呼ばれたのであろう。そこで隠者は主人公に「単純（Simplex）」を意味する「ジンプリチウス（Simplicius）」という名を与え、二人は自分達が実の親子であることを知らぬまま、擬似親子としての生活を送る。こうしてフォン・フックスハイム父子は、その名の通り、「狐（Fuchs）」の「住まい（Heim）」のような粗末な小屋で暮らし、実父である隠者は実の息子ジンプリチウスにキリスト教信仰と文字の読み書きなどの教育を授けて、数年後に亡くなる。彼は今際の際に「お前は長く生きればそれだけたくさん自分自身を知らなければならぬ」（S. 48）という言葉を残す。「自分自身を知る」ことは、ジンプリチウスは理解していないが、彼にとって重要な課題になる。

ここで、主人公の通称「ジンプリチウス」について考えておこう。「単純」という語は、これから知識や経験が書き込まれる白紙を意味し、主人公が知

リチウスの役に立つ技術になったが、それは狭義の医学的知識の実践を意味するわけではない。その手掛かりになるのは、ジンプリチウスが、医学的知識を身につける前にケルンに滞在していたときに下宿先で学んだという病気観である。

私は彼〔下宿先の主人〕のところ^{やおよろず}にいた時期に沢山のことを学び、とりわけ八百万の病気を知った。それは医学博士の術の中の術である。病気を正しく言い当てれば病人は治ったも同然だ。私は下宿先の主人のおかげでそのような知識を手に入れた。それというのも、彼個人から学んだことを他の人たちおよびその病気の複合体に当てはめてみたからである。すると私は、しばしば自分の病気を知らず、他の人によって、しかも医者によっても健康と見なされる多くの人たちが重病であるとわかった。
(S. 338)

ジンプリチウスの下宿先の主人は、公証人と弁理士を兼務した上で宿を営んでおり、かなり稼いでいるのだが、極度の吝嗇家であった。彼は下宿人を騙して貯金に励み、下宿人達はその腹いせに主人に悪戯をする。ジンプリチウスは、彼らの攻防を通して病気に関する知識を入手したと言う。彼によると、病気は、自覚症状がないけれども人間を死に至らしめるほど重いものであり、「怒り」(S. 338)、「妬み」(S. 339)、「賭博癖」(ebd.)、「暴飲暴食」(ebd.)、「傲慢」(ebd.)、「笑い」(S. 340)、「お節介」(ebd.)、「怠惰、復讐心、熱中、冒瀆的行為、愛の衰え、それに類する病気と悪徳の数々」(ebd.)がそれにあたる。これらは一般に悪癖に分類されるものだが、ジンプリチウスによると、これらが身体的疾患を引き起こす原因である。彼は日常生活の中で湧き上が

様々な感情とそれに由来する行動を「病気」と見なし、それら根本的感情を指摘することによって身体的疾患の治癒が可能になる、と考える。「医学博士の術の中の術」とは、身体的疾患の根本にある感情ないし悪癖の正体を暴くことに他ならず、ジンプリチウスはフロイトの精神分析を彷彿とさせる病気観を抱いていると言えるだろう。彼は八百万の「病気」、人間の感情や癖に知悉し、それを言い当てて治療する点で、「薬草取り」に擬せられる。

ジンプリチウスが知識を渴望しているのは、人間観察に基づいて独自の病気観を形成したことや、時間を見つけて読書に明け暮れることにも明らかである。松井氏によると、彼は「人間の魂の救済」を問題にする神学と「人間の肉体の治癒」を問題にする医学の両領域を拠点にして、博学への志向を抱いている⁽¹⁴⁾。上述のように、医学的知識は、人々の感情や癖を知り尽くして世間知に長けるための術となった。それに対し、彼の神学的方面への関心、すなわちキリスト教に対する態度は一筋縄ではいかない。三十年戦争ではカトリックとプロテスタントの区別が重視されていたが、ジンプリチウスは両者の教義の区別を知らず、信心深いふりをするかと思えば瀆神の行為に走っており、信仰心を持っているのかも疑わしい。それでも彼が何度も隠者になり、作品末で隠遁生活を選ぶため、読者は惑わされるのだが、彼は、詐欺、強盗、殺人を働く悪党ピカロであり、また彼の本名メルヒオールが魔術師に由来するように、その魔術的な力で読者を煙に巻くのはお手の物なのである。

一般に悪党ピカレスク小説は、社会の最下層出身の主人公が定職を持たずに放浪し、回想形式で自分の経験を語り社会を風刺するという特徴を持つ。ジンプリチウスもピカロの例に漏れず、放浪生活と主人に仕える生活を繰り返す。彼は隠者を引った後、放浪を経て、ハーナウで司令官の小姓に、次いで道化になる。再び放浪生活に入ると、兵士になって「ゾーストの狩人」という異名を

取り、栄達して結婚する。彼は結婚直後にケルン、続いてパリへ行く羽目になり、パリで「ボー・アルマン」と呼ばれ、酒池肉林の生活を送り、ここから逃げ出すと、偽物の薬を売る行商人になり、仲間に合わせて追いはぎをしたり、巡礼に赴いたりする。その後、彼は育ての両親と再会して一緒に暮らし始めるが、再び巡礼者になってエルサレムを目指す。その途中、彼は掠われ、どうにか逃げ出して乗り込んだ船が難破したため、南の海の孤島にたどり着く。そして、この地で隠者生活を送りながら記した回想録を、寄港したオランダ人船長に託すことになる。

ジンプリチウスは、身分と職業を変えながら場所を移動する点で、「渡り人」と呼ばれる人たちの一人である。三十年戦争期に「渡り人」を代表するのは傭兵であり、ジンプリチウスもまた軍を主な活躍の場にする傭兵であった。彼は軍に入ってすぐに平民出身の兵士達が立身出世の難しさを嘆くのを耳にしたが、彼も自分が貴族であると知らないため、階級制度に苦勞する⁽¹⁵⁾。十七世紀において「渡り人」は、農村や都市に定住しない、あるいはできない人、流浪生活をする人、遍歴や出稼ぎで仕事をする人全般を指し⁽¹⁶⁾、彼らは都市や農村の定住する人たちから胡散臭い人物と見なされた⁽¹⁷⁾。こうした状況を踏まえると、ジンプリチウスが人々を騙して、食物や金を手に入れ、その際に良心の呵責を感じないことは、とりたてて奇異ではない。それというのも、「渡り人」が自分達を蔑視する定住民をやり返して痛快に思うのは理解しうることであり、また当時一般に戦時の略奪は合法的行為と見なされ⁽¹⁸⁾、兵士を職業とする「半ば独立的な自営業者の一経済活動」であったからである⁽¹⁹⁾。ジンプリチウスは「渡り人」としての苦境を逆手にとって才覚一つで身を立てる術を身につけていく。このようにその時々状況に合わせて仕事や仲間、自分のあり方さえ変えるやり方は、劇場で役者が仮面を変える様に

似ている。ここで作品の表紙に立ち戻ると、怪物が複数の仮面を踏みつける姿は、ジンプリチウスが場面に応じた役を演じて、その都度その役割を脱ぎ捨てて次の場面に移っていくことを示している。

4 驚異の世界、ムンメル湖

三十年戦争が終わると同時に、ジンプリチウスは傭兵としての生活を終えて、しばらく放浪した後、育ての父に偶然再会して、自分の出自を知る。彼は、再婚した妻を亡くし、育ての両親と三人暮らしを始めた頃に、ムンメル湖の噂を聞く。ムンメル湖は黒い森地方に実在する、標高 1036 メートルにある、湖面 3.7 ヘクタール、湖岸 800 メートル、水深 18 メートルの湖である。彼はムンメル湖に関する不思議——豆や石を布にくるんで沈めると偶数は奇数に、奇数は偶数になるという話、石を投げ込むと天候が悪化するという話、地の精や水の精がいるらしいという噂——を聞くと、父に案内を頼んで湖に向かう。そして彼が湖に石を投げ込むと、ムンメル湖の王子である水の精が現れて、ジンプリチウスを地球の中心に連れて行く。傍から見ると、彼は神隠しにあったかのようにであったが、実際には水の精から水中で息をするために必須の「宝石」を借りて、嬉々として地球の中心に向かった。その途中、王子は水の世界について彼に語って聞かせる。

これらの湖は三つの目的のために作られています。まず、すべての湖は、どんな名前を持ってしようと、あの太平洋も、いわば釘で付けられたように、これらの湖を通して、地球と繋がっています。次に、これらの湖を通して、私たちは（あなたがた人間が水に関する技術として用いる、貯水、

ホースあるいはあの長靴型の管のように) 大洋の深淵から水をあらゆる源へ送り出します。(これが私たちの仕事です) それから世界中の泉はすべてそこから流れ出て、大小の水の流れが生じ、大地は湿り、植物は活き活きとし、人間と動物たちは飲むことができます。第三に、私たちは神が造った理性的な創造物としてここで生きており、己の仕事をなし、創造主である神の奇跡の業を褒め称えねばなりません! このためにこそ私たちとこれらの湖は作られ、最後の審判まで生き続けるのです。(S. 495)

ムンメル湖の王子によると、世界各地の湖にはそれぞれ管理人というべき水の精の王子がいて、どの湖も地球の中心に繋がっている。つまり、水の世界の地上での現れが湖であり、それらの源は地球の中心にあり、ここから水の供給が行われる。人間が悪戯で湖や池、川などに石を投げ込むと、「貯水、ホースあるいはあの長靴型の管」にたとえられるシステムに傷が付く。そのため、水の精は投げ込まれる石を取り除き、水の供給システムを管理しなければならない。地上に水が流れて、動植物が潤されるのは、水の精の働きに因るのである。ところで、王子の話の中で少々奇妙に響くことがある。それは、四大元素(地・水・火・風)の精は一般に異教的存在とされ、ハインリヒ・ハイネ(Heinrich Heine, 1797-1856)が『精霊物語』(1837)の中で、これらの精がキリスト教世界から追放されたと嘆いたにもかかわらず⁽²⁰⁾、王子が自分たちを「神が造った理性的な創造物」と表現する点である。これは、作品の舞台がカトリックとプロテスタント間の宗教戦争の時代であり、教義の違いはあれ、キリスト教の世界観が前提とされることに拠る。ジンプリチウスは、隠者からキリスト教の教えを受けており、キリスト者として異教的世界に入り込むことは許されない。彼が異次元に行くならば、そこはキリス

ト教的世界でなければならない。従って水の世界もキリスト教の体系の中に置かれる。水の精は地球の中心で天使さながらに「神の奇跡の業を褒め称え」るが、有限な生命と肉体を持つ点で天使とは異なる。さらにその生命は人間の寿命よりも遙かに長く続くが、人間が持つとされる永遠の生命ではない。水の精は天使と人間の間にいる理性的な被造物とされ、地球の中心で「神の奇跡の業を褒め称え」ながら、「最後の審判まで生き続ける」のである。

ジンプリチウスは知識欲にかられてムンメル湖の王子に質問をする。彼が活躍する黒い森地方では古くから温泉文化が栄えていることから⁽²¹⁾、彼は温泉について、なぜ場所によって水の色や匂い、成分が異なるのか問う。王子曰く、水は地球の中心から湖などの源にまっすぐ達するならば、冷たくて甘いのだが、その途中の岩石の層に含まれる成分——金・銀・銅・鉛・鉄・水銀・準金属など——を通り抜けるときに、それらの味や色、匂い、性質、効果、作用を帯び、それは人間の身体に効能をもたらす場合も有害な場合もある。(S. 502f.) ムンメル湖の王子はこの件は人間の自然研究者によって知られていると言う。それはパラケルスス (Paracelsus, 1493/94-1541) を指し、近代におけるオカルティズムの立役者としてのイメージが強いこの人物は医者として数々の著作を残している⁽²²⁾。パラケルススは、『自然湯治について』(1525)⁽²³⁾の中で、湯が地中から湧き出る仕組み、温泉の種類とそれぞれの効果について述べ、各地の温泉を具体的な分析対象にして、どの温泉にいかなる金属ないし準金属、薬草の成分が含有され、それらが人間のどの病気に効果的かを論じる。このように十七世紀前半のドイツ語圏においてパラケルススの説が温泉文化の理論的裏付けになっていたのだが、ちょうどこの時期、黒死病の頻発に伴い、黒い森地方の温泉文化は衰退の一途を辿っていた。しかし、ジンプリチウスは温泉施設を経営して金を儲けたいと思い、水の世界

の王様に地上の話をしたお礼にお土産を貰えると聞くと、温泉を所望する。すると、王様は「奇妙に色が変わる石」(S. 515)をジンプリチウスに渡して言う。「あなたがこの石を地上に置くと、これは地球の中心に向かって動き出し、最上の鉱物を通り抜けて、私たちのところに到達します。そしてあなたは私たちから素晴らしい炭酸泉を贈られて、心身共に健やかになり、私たちは真実を話してくれたお礼を受け取るのです。」(ebd.) この不思議な石は水の王様の元に戻る性質を持つため、ジンプリチウスが地表にこれを置けば、「最上の鉱物」の層を通して、地球の中心へ帰り、その通り抜けた穴から「素晴らしい」温泉、すなわち「炭酸泉」⁽²⁴⁾が湧き出すという。ジンプリチウスは意気揚々と地上に戻るが、道に迷って野宿した際に、就寝中の彼の上着のポケットに入っていた石が地面に触れたため、彼が予想もしなかった場所に炭酸泉が湧き出してしまふ。こうして自分の土地に温泉施設を整備して金を儲けようというジンプリチウスの目論みは失敗に終わる。

これまでジンプリチウスはドイツとフランスを縦横無尽に移動してきたが、それは場所の移動だけでなく、農家の倅から小姓、道化、兵士、行商人、追いはぎなど様々な身分を経験する移動でもあった。彼は、ムンメル湖に赴く直前に、育ての父から、自分が貴族の出身であること、実の両親が何者か、いかにして育ての両親に委ねられたか、を教えられ、実の父である隠者が残した「自分自身を知らなければならない」との遺言通り、自分の素性を知る。その上で彼はムンメル湖から次元を超えた移動を行い、通常人間が与り知ることのない水の世界を見聞した。そこでムンメル湖が驚異の世界を体験するための入り口になった理由を、その名前から考えよう。ムンメル湖の「ムンメル(Mummel)」という語は、俗に「睡蓮(Mummel)」と呼ばれる白い睡蓮に由来する。この語に関して、ジンプリチウス自身が「ムンメル——湖というドイツ

語の名は仮面舞踏会のように変装した存在を意味する」(S. 487)と述べて、さらに「mummeln」という動詞に由来するとの吉田氏の指摘を踏まえれば⁽²⁵⁾、布に「包み込ま (mummeln)」れた石や豆がこの湖の中で増減するという噂通り、この湖はものを変化させる場なのである。ジンプリチウスの場合、ヨーロッパ内での地理的移動や人間社会での職業上の移動といった水平的移動が、ここで、次元を越えた垂直的移動に転換した。つまり、ムンメル湖体験は彼の移動の性質そのものを変化させたのである。そしてこの後、彼は人間の世界とは違う世界とコンタクトを取る術を学ぶことになる。

5 バルトアンダース

ジンプリチウスは、ムンメル湖から戻った後、森を散歩していると不思議な石像に遭遇する。この石像はバルトアンダースと名乗り、ジンプリチウスに話しかける。

私はまさにすぐ^{バルトアンダース}変身するもの、お前がそう言い、そう理解したものだ。私はお前の人生のあらゆる瞬間にお前の側にいたのだが、お前が私を知らなかったということもありうるだろう。私が1534年の7月末にニュルンベルクの靴屋のハンス・ザックスと話したように、お前と口を利かなかったことも、お前が私をわからない理由だろう。私は他の人よりもお前を大きくしたかと思えば、小さくし、金持ちにしたかと思えば、貧乏にし、身分を上げるかと思えば、下げ、愉快にするかと思えば、悲しくし、悪くするかと思えば良くして、まあ要するに、あれこれ変身させてきたのだ。(S. 604)

「バルトアンダース (Baldanders)」という名は、「すぐに (bald)」と「別の (anders)」という語が組み合わさったものであり、この石像が森羅万象の変化を統べる存在であることを示す。彼は、ジンプリチウスのこれまでの人生の浮沈を続けていたと述べる。これまでジンプリチウスは身分を変え、金持ちになったり無一文になったり、美男から醜男になったが、彼の身に降りかかった変化はすべて、バルトアンダースの仕業だったとされる。彼は、バルトアンダースに出会ってはじめて自分の人生を振り返り、実の父親の遺言通り、「自分自身を知る」ことを始める。ここでバルトアンダースが名指しする「ニュルンベルクの靴屋のハンス・ザックス」^{マイスター・ジンガー}とは職匠歌人のハンス・ザックス (Hans Sachs, 1494-1576) であり、「1534年の7月末」という具体的な日付は、ハンス・ザックスが末尾に「キリスト暦 1534年7月31日」と記した詩「我、全世界に知られる、バルトアンダーストと呼ばれるもの」を指す。ザックスの詩では、「私」がライン川へ釣りに出かけるときに、何やら変身しつづける者を見かけて、火と鍛冶の神ウルカヌスかと思ひ話しかけると、相手は「バルトアンダースト (Baldanderst)」であると名乗り、あちこちであらゆるものを変えてきたと説明する。だが彼が列举する例をいくつか見ると、「平和な者を争いに巻き込み」、「実り豊かな者を暮らしにくくし」、「おおらかな者を怯ませ」、「金持ちを貧乏で悲惨な生活にし」などとあり⁽²⁶⁾、人間を良い状態から悪しき状態に落とすことが多い。バルトアンダーストが自ら変身した後で他のものを変化させる役割についてザックスに語ったのに対し、バルトアンダースは初めに他のものを変化させる役割を述べてジンプリチウスの前で変身してみせており、こちらでは森羅万象を変身させる役割に重点が置かれている。

森羅万象を変化させるというバルトアンダースの力は、現世的なものの儂

さ、虚しさを見せつけるものでもある⁽²⁷⁾。目に見えるものがすべて移り変わるのであれば、変わらないものを見抜き、「自分自身を知る」ようにならねばならない。『ドイツの冒険者ジンプリチシムス』の1671年版の挿絵のほぼすべてに「思い込みは欺く (Der Wahn betrügt)」という句が書き込まれてある⁽²⁸⁾ことも、人間が目に見えるものに頼り、「思い込み／妄想 (der Wahn)」を作り上げ、自らの「思い込み／妄想」により、目に見えない部分を見誤り、「欺かれ」ることへの警報になっている。

では目に見えない部分も含めて物事を捉えるためにどうすればよいのか。バルトアンダースは生命なき存在と対話を交わす秘術をジンプリチウスに授けるべく、謎めいた言葉を記した紙を手渡す。それは、「我、初めにして終わりなり、あらゆる場所に当てはまる。」(S. 604) という一文で始まり、無意味なアルファベットが羅列されている。

Manoha, gilos, timad, isaser, sale, lacob, salet, enni nacob idil dadele neuaco ide eges Eli neme meodi eledid emonatan desi negogag editor goga naneg eriden, hohe ritatan auilac, hohe ilamen eriden diledi sisac usur sodaled auar, amu salif ononor macheli retorran; Vlidon dad amu ossosson, Gedal amu bede neuavv, alijs, dilede ronodavv agnoh regnoh eni tatae hyn lamini celotah, isis tolostabas oronatah assis tobulu, VViera saladid egrivi nanon aegar rimini sisac, heliosole Ramelu ononor vvindelishi timinitur, bagoge gagoe hananor elimitat. (S. 604f.)

バルトアンダースと別れた後、ジンプリチウスはこれらの文句をじっと見つめるうちに、各語の最初と最後のアルファベットを取り出せば、意味のある

言葉が浮かび上がることに気付く。紙に記された最初の一文にある「初めにして終わり」とは、この謎めいた言葉の読み方を暗示していたのである。

あらゆるものがどのような状態にあるか想像せよ、その後で、議論してみれば、真実に似たものをわかり、汝は愚かな好奇心を満たすことができる。

Magst dir selbst einbilden, wie es einem jeden ding ergangen, hernach einen discurs daraus formirn, und davon glauben, was der wahrheit ähnlich ist, so hastu was dein nährischer vorwitz begehret. (S. 1017)

バルトアンダースの秘術において対象認識が問題となる。森羅万象は外見が常に変化するものであり、人間はある対象と向き合うとき、対象が置かれた全体的な状態を想像し、その意味を考察する。もちろん生命のないものとの間では、人間同士で行うような対話を交わすことはできないが、想像の中で対象と議論して、そこから「真実に似たもの」を引き出す。その際、バルトアンダースは「真実」そのものではなく「真実に似たもの」がわかるだけだと言う。ここで「わかる」と訳した語は「信じる／～と思う (glauben)」であり、ここから、そもそも対象に内在する「真実」などなく、あるとしてもそれは「真実に似たもの」に過ぎず、それを人間は真実ないし事実と「思う」だけなのだというニュアンスが読み取れる。こうして人間は「真実に似たもの」を「真実」と「信じる／思う」ことにより、対象に向けた「愚かな好奇心を満たす」のである。

ジンプリチウスは、この秘術を知ってしばらく経った頃、ある貴族の屋敷に泊まり、そこでトイレットペーパーと珍問答をする。彼は、トイレット

ペーパーの来歴を聞き、「愚かな好奇心を満たした」後、トイレットペーパーを使用して、トイレットペーパーの生に終止符を打った。バルトアンダースの秘術は認識論的問いを孕み、自分自身を知れという隠者の遺言を変奏した高尚なものだったが、ジンプリチウスがトイレットペーパーとの関係において実践すると滑稽なものに成り下がり、彼は「好奇心を満たす」だけである。

6 移動を終えて

最後に、表紙の怪物＝「私」がわかったと述べたことをジンプリチウスの移動に照らして、グリーンメルスハウゼンの世界観に迫りたい。ジンプリチウスは、ヨーロッパ各地を縦横無尽に移動して、百姓から貴族へ身分や職業を次々に変え、更に人間界を越えて驚異の世界を見聞し、生命なき存在と交流する術を身につけた。彼はバルトアンダースからこれまでの身分や場所の移動がバルトアンダースの仕業であったと聞いて、諸行無常を実感するが、なおも「愚かな好奇心」を持って移動を続け、最終的にヨーロッパから遠く離れた無人島にたどり着き、「愚かさから離れて、静かに生きる」ようになる。怪物が四大元素に対応する部位を組み合わせたハイブリッドな身体を持つことを踏まえ、ジンプリチウスの移動を四大元素に即して振り返ると、彼はヨーロッパ各地を歩き回り（地の世界）、ムンメル湖体験をして（水の世界）、様々な身分や職業に就いてそのたびに生まれ変わり（火の世界）、本稿では言及できなかったが、第2巻17章で魔女の宴会に参加するために飛んでおり（風の世界）、四大元素から成る世界を自在に動き回ってきたとわかる。怪物＝「私」は、この縦横無尽な移動を終えて諸行無常を実感し、「そのために心暗いこと多く、陽気になることは滅多にない。」と言い、サトゥルヌス風の表情を浮か

べる。怪物は四大元素から成る世界を動き回ったジンプリチウスの拡大像であり、怪物＝「私」が好奇心旺盛に知識を求めて森羅万象の中を動き回った冒険譚を語ることにより、十七世紀半ばのヨーロッパの社会が想像力豊かに膨らんだ世界となって浮かび上がる。この歪な世界の中で、バルトアンダースに翻弄されようとも「静かに生きる」こと、これがグリーンメルスハウゼンが読者に伝えようとしたメッセージである。

注

- (1) Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen: *Simplicissimus Teutsch*. (Hrsg.) Dieter Breuer. Frankfurt am Main 2005. 以下本書からの引用はページ数を記す。
- (2) 関口存男 (東西出版社、1948-49)、上村清延 (河出書房、1951) 望月市恵 (岩波書店、1953) による翻訳の作品名はいずれも『阿呆物語』である。
- (3) 表紙は版が改まるたびに違うものになり、1671年版では上段と中段は1669年版と同じだが、下段のテキストが省かれており、1683年版では表紙とほぼ同じ内容 (ただし中段の怪物がメランコリックな表情を浮かべている点が異なる) である。
- (4) Vgl. Günther Weydt: Über den Titel des 'Simplicius Simplicissimus' und die fiktive Namengebung des Autors und Helden. In: „Sagen mit Sinne“. Festschrift für Marie-Luise Dittrich zum 65. Geburtstag. (Hrsg.) Helmut Rücker und Kurt Otto Seidel. Göppingen 1976. S. 281-290. Hier S. 286.
- (5) グリーンメルスハウゼンが参照したであろう、ブーホルツ (Andreas Heinrich Bucholtz) による翻訳「短い覚え書き付きのドイツ語版詩論 (Verteutschte und mit kurzen Noten erklärte Poetereykunst)」(1639) を日本語に訳した。Vgl. John Roger Paas: Applied Emblematics. The Figure on the 《Simplicissimus》-Frontspieces and its Places in Popular Devil-Iconography. In: *Colloquia germanica: internationale Zeitschrift für germanische Sprach- und Literaturwissenschaft* 13. 1980. S.303-320. S. 306.
- (6) Vgl. Paas: a.a.O., S. 304.
- (7) Vgl. Hubert Gersch: Literarisches Monstrum und Buch der Welt. Grimmelshausens Titelbild zum *Simplicissimus Teutsch*. Tübingen 2004. S. 25.
- (8) Vgl. Gersch: a.a.O., S. 32.
- (9) Hans Geulen: Wirklichkeitsbegriff und Realismus in Grimmelshausens *Simplicissimus*

- Deutsch*. In: *Argenis: Internationale Zeitschrift für mittlere deutsche Literatur*. 1. 1977. S. 31-40. Hier S.35.
- (10) 主人公の育ての父は、マンスフェルトの戦い（1622）で主人公を貰い受け、ネルトリンゲンの戦い（1634）で失ったと述べている。Vgl. S. 477.
- (11) 東方の三博士はベツレヘムの聖母子を礼拝した魔術師であり、ヨーロッパでは中世以降、老年のガスバルが金を、中年のバルタザルが乳香を、青年のメルキオルが没薬を聖母子に贈ったとされる。
- (12) Vgl. Peter Heßelmann: Tomaso Garzoni: Piazza Universale. In: Projektportal „Welt und Wissen auf der Bühne. Die Theatrum-Literatur der Frühen Neuzeit. Repertorium. Hg. von Nikola Roßbach und Thomas Stäcker unter Mitarbeit von Flemming Schock, Constanze Baum, Imke Harjes und Sabine Kalf. Wolfenbüttel: Herzog August Bibliothek 2012“, (edoc/ed000171) S.1-8. Hier S. 5f.
- (13) Tommaso Garzoni: Piazza universale: Das ist: Allgemeiner Schauplatz, Marckt und Zusammenkunfft aller Professionen, Künsten, Geschäften, Händeln und Handwercken, &c. : Wann und von wem dieselbe erfunden: Wie sie von Tag zu Tag zugenommen: Sampt außführlicher Beschreibung alles dessen, so darzugehörig: Beneben deren darin vorfallenden Mängeln Verbesserung: Allen Politicis, auch jedermänniglich, weiß Stands der sey, sehr nützlich und lustig zu lesen. Franckfurt am Mäyn 1659. S. 214-220.
- (14) 松井隆幸「博学趣味と学識蔑視—グリーンメルスハウゼンにおける—」、『名古屋大学人文科学研究』25号、1996、S. 1-17。Hier S.2.
- (15) 三十年戦争の時期の軍隊は傭兵軍であり、いわば「傭兵隊長という軍事企業家によってつくられた企業」であった。傭兵隊長は、君主と契約を結ぶと、有能な連隊長たちに連隊編成の特許状を与えて業務を下請けさせ、連隊長たちは中隊長を任命して業務を孫請けさせた。この中隊長職が軍隊における分水嶺的地位であり、これ以上の階級は貴族が、これ以下は平民と、出自によって区別されていた。鈴木直志『ヨーロッパの傭兵』、山川出版社、2016。9ページ以下参照。
- (16) 鈴木：上掲書 16ページ以下参照。
- (17) フランツ・イルジーグラー／アルノルト・ラゾッタ（藤代幸一訳）『中世のアウトサイダー』、白水社、2012、19ページ参照。
- (18) 鈴木：上掲論文 48ページ以下参照。
- (19) 山内進「初期近代ヨーロッパにおける略奪とその法理（一）」、『成城法学』24、1987、95-137ページ。113ページ参照。

- (20) Vgl. Heinrich Heine: Elementargeister. In: ders.: Sämtliche Schriften. (Hrsg.) Klaus Briegleb. Band III. (hrsg.) Karl Pörnbacher. 1996. S. 643-703.
- (21) 十五世紀初期に浴場詣でが流行し、なかでも黒い森の野外浴場が流行った。Vgl. イルジーグラー／ラゾッタ上掲書 S. 119。
- (22) パラケルススについては、種村季弘『パラケルススの世界』、青土社、1996 参照。
- (23) Paracelsus: De Thermis (Ueber die natürlichen Bäder) 5 Traktate über ihre arzneilichen Tugenden und Kräfte. In: ders.: Sämtliche Werke. Band III. (Hrsg.) Bernhard Aschener. Bischofswiesen. 1993. S. 713-738. パラケルススは以下の論文でも温泉について論じている。Vgl. Ueber das Bad Pfeffers in der oberen Schweiz gelegen. In: Paracelsus: a.a.O., S. 738-753. および Fragmente über die heißen Quellen (de thermis). In: Paracelsus: a.a.O., S. 753-761.
- (24) ムンメル湖の王子によると温泉は湧き出す場所により種類が変わるのだが、ここで水の王様が温泉を「炭酸泉 (Sauerbrunnen)」に限定するのは、黒い森地方に湧出する温泉の多くが炭酸泉であるためであろう。ちなみに吉田氏は、「炭酸泉」が硫酸鉄を含む鉱泉であることから、「鉄鉱泉」という呼称を提案しているが、本稿では、一般的な温泉区分に従って「炭酸泉」としておく。吉田孝夫：温泉文学としての『ジンプリチムス』、欧米言語文化研究、第4号、2016、136 (1)-106 (31) ページ。Hier S. 125 (12)。
- (25) 吉田：上掲論文 S. 117 (20)。
- (26) Hans Sachs: Dichtungen. Zweiter Theil: Spruchgedichte, Leipzig 1885. S. 52-55.
- (27) Vgl. Rolf Tarot: Simplicissimus und Baldanders. Zur Deutung zweier Episoden in Grimmelshausens *Simplicissimus Teutsch*. In: Argenis: internationale Zeitschrift für mittlere deutsche Literatur. Jahrg. 1, Heft 1 (1977)-Jahrg.2, Heft 4 (1978). S. 107-129. Hier S. 120.
- (28) ちなみに、グリーンメルスハウゼンの死後に出版された 1683 年版の挿絵にはこの句は記されていない。